Dick King-Smith の作品に於る可能性追求のメッセージ

稲　田　依　久

Dick King-Smith's Message—Advocacy of Self-Realization

Iku Inada

抄　　録

英国の児童文学作家 Dick King-Smith の二作品、*Daggie Dogfoot* と *The Sheep-pig*、に於る自己実現のテーマを教育性の見地から概観する。

キーワード：自己実現、児童文学

(1995 年 9 月 9 日　受理)

Abstract

This is a review of Dick King-Smith's stories for children, *Daggie Dogfoot* and *The Sheep-Pig*. The theme of the two novels is "self-realization" through making efforts, which may give hope and encouragement to young readers.

Keywords：Self-realization, Children's literature

(Received September 9, 1995)

I

児童文学の文学としての位置付けは、原田清人、原昌が「児童文学概論」で「児童文学と一般文学との差異は、その本質にかかわる問題ではなく文学形式と内容にかかわる問題である。[1]」と述べているところに集約されよう。しかして児童文学は「子どものため（目的・対象)、子どものもつ（共有）子どもの選んできた、また選んでいく（選択・継承）文学の広い意味の総称[2]」なのである。それ故に「子どものため」の作品を創るに際してはおとなと異なる児童の特性を考慮する必要がある。これが文章の構造、用語といった形式や、テーマ・問題意識などの内容やその取りあげ方に関わる差異を生じさせる。加えて面白さが惹きおこす「興味性[3]」が大きな要素となる。しかしながらこの点について原田・原は前掲書でヒュー・ロフティングの言葉を引用して、児童への単なる迎合的姿勢は好ましくないとしている。[4] これは子どものための作品は「知的にも精神的にも子どもの成長に末永く役立つもの[5]」であることを目指す立場からは当然といえる。即ち児童文学には理想・人間の望ましいあり方、生き方、普遍的価値観、真実が語られること、言いかえれば「教育性[6]」も大きな要素だからである。

以上の要素を含んで、児童文学作品として評価を得、広く読まれている作品は現在多くあり、更に多くが創られている。その中で動物ファンタジー[7]に分類される Dick King-Smith 著の *Daggie Dogfoot*[8] と *The Sheep-Pig*[9] をここでとりあげ、「教育性」という視点から二作に於る可能性の追求、自己実現というテーマの展開を概観する。

II

Daggie Dogfoot、*The Sheep-Pig* はともに仔豚を主人公とした動物ファンタジーである。著者の英国人 Dick King-Smith はかつて農場で働いていたことがあり、ペットの飼い方に関する著書を著していることからもうかがえるように動物に関する知識、興味を有している。それゆえに作品に登場する豚、鴨、カワウソ、牧羊犬、羊等の動物の生態が十分に観察、把握されていることが随所にうかがえる[10]。これは動物物語にあっては作品の迫真性を強めるのに役立っており[11]、動物の生きている状況に現実味を帯びさせ、物語を独自の世界に作りあげている。この点を更に助長しているのは両作品ともに動物と人間は言語による伝達、意志疎通は不能であるという前提[12]の上に書かれている点である。これは動物と人間とはそれぞれ別の秩序の下に生きていること、即ち安易な擬人化を避けることで人間が介入しえない領域としての動物界を設定し、独自の世界を更に際立たせている。この動物の世界で Daggie と Babe[13] の二頭の仔豚が願望、決意を抱いて自己の可能性を追求する過程を概要と共に以下に述べる。

A. *Daggie Dogfoot*

概要：ある養豚場に食用家畜として価値ある Gloucester Old Spots 種の純血種の豚が飼われていた。牡豚一頭と九頭の牝は立派な仔豚を産むことに価値を見、誇りとしていたがある時ひ弱なうえに前足がイヌの足のように変形した仔豚の Daggie が生まれる。養豚業者にとっては無用でしかない Daggie は棍棒で打ち殺されそうになる。が、ねずみの出現という偶然の幸運から養豚業者の注意が

Daggie からそれ、Daggie は母豚のいる小屋に駆け戻って奇跡的に九死に一生を得る。それ迄に生まれたひ弱な仔豚はすべて殺されてきたにも関わらず Daggie は生還したことから牡豚達は Daggie を英雄と賞賛する。この時点から Daggie の存在は何か特別なものとみなされ、前足の変形も何か特別な目的のために利点を発揮するためのものと目されるようになる。このことをある牝豚が「思いもよらぬことがおきるかもしれない」、"Pigs might fly"（p. 25）と評し、Daggie が、これを聞いて字義通り解釈し、好奇心から空を飛びたいという願望を抱くようになる。

空を自力で飛ぶことは豚には不可能であることは飛ぶ練習の初回で川にはまって溺れそうになって Daggie はすぐに納得する。が、その練習を指導するために立ち会っていた鴨の Felicity の助言を得て、溺れかけた Daggie は泳ぎを習得する。豚仲間では豚は泳げないと信じられていたにも関わらず、Daggie は不可能を可能とし、さらには鴨にも負けぬ速さで泳げるまでに熟達する。Felicity に加えてカワウソの Izaak も指導者として潜水を Daggie に教えて泳ぎの習得は完結する。

このようにして習得した技能が洪水という非常事態に際して豚達の餌の確保、救出につながり、また漂流していた養豚業者の命を Daggie 自身が危険にさらされながらも的確な判断で二度までも救うこととなる。豚と養豚業者がひとまず農場で安全な状態に戻った頃、Daggie を水中に引きこんで溺れさせようとした堰の主のカワカマスを Izaak が倒し、その肉を Izaak と共に食べて Daggie は満腹で眠っていた。それを死んだと誤認され、Daggie は養豚業者を救出した軍のヘリコプターの救助索に吊り下げられて農場へと運ばれる。途中で目を覚ました Daggie は空を飛ぶ夢がかなったことを喜び、皆が待つ農場に英雄として戻る。

人間の目からはひ弱に生まれた無用者として殺されるべき運命にあった仔豚であり、豚仲間にとっては「仕方ないことではあるがそれでも残念な」（p. 8）存在であったひ弱で前足の変形というハンディキャップを有する仔豚の Daggie は、偶然耳にした「豚だって空を飛ぶかもしれない」を誤解からであるにもせよ、自らの願望・目的とした。そのことで Daggie は可能性開発の機会を得、よき指導者 Felicity と Izaak の助言と助力の下での努力と勇気ある行為で、豚仲間からの賞賛だけでなく、豚を馬鹿で汚く、どうしようもない動物とみなしていた人間の養豚業者の評価と感謝を獲得して存在意義を認められる。このプロットは小澤俊夫が「昔ばなしとは何か」の中で昔話が採る手法の「外観と実質[14]」のずれ、主人公の「孤立性[15]」、「決定的に大事な場面に於る忠告者[16]」、「勇敢－救済への条件[17]」、「他者への親切[18]」、に呼応しており、この物語の面白さを裏付けている。なかでも勇敢、勇気がこの物語では最重要の要因となっている。豚が恐れて近寄らない水にはまった時、水中で未知の動物であるカワウソに出会った時、危険な洪水のなかでの偵察と養豚業者救出、Izaak の宿敵であるカワカマスとの水中での戦い、そのいずれの危険をも Daggie が脱しえたのは勇気ある行動の故であり、その結果 Daggie は農場という社会に於て豚・人間双方からの評価を得る存在とな

る。しかしDaggie自身は他者の評価には頓着せず、恬淡としており、一旦諦めた空を飛ぶという夢が実現したこと、また泳ぎを習得したという自らの能力開発の結果で満足している。Daggieの自己実現は、自らの努力で獲得し身につけたものによると同時に、それがもたらす状況の変化の中で、善意の意図・行為は言語による意志疎通不能な状態でも理解されうるという新しい関係への可能性の示唆であるといえる。

B. *The Sheep-Pig*

概要：Largewhite種の仔豚Babeは体重が31¼ポンドという小さい時に母親、兄弟姉妹から離されて、村のFairの体重あてゲームの商品として牧羊農業主Hoggetにもらわれる。数ヶ月後のクリスマスには殺されて食べられる運命と知らぬままBabeはボーダーコリーの牧羊犬Flyを養母とし、その行動をまねて農場での生活に慣れていく。賢いBabeはHoggetの優しさを初対面の折りに一目で感じとり、農場にいるからには何か役に立つ存在でありたいと思い始め、「牧羊豚になりたい」、"Why can't I learn to be a Sheep-pig?"（p. 29）と決意し、アヒルを相手にFlyから牧羊の基本技術を学び始める。

牧羊犬は羊の言うことに耳を貸さず命令すればよいというFlyとは異なりBabeは初めて出会う羊である牝羊Maが足を痛めて小屋に連れてこられた時に丁重に話しかけてその心をつかむ。他の羊にも会おうと牧場に出かけた日、二頭の犬とトラックを使ってHoggetの羊を盗もうとしている羊泥棒に出会う。ここでも羊達に丁重に話してトラックに乗り込まぬように頼んだ後、Maの助言に従って大声で鳴いて泥棒を退散させる。この活躍でHogget夫人に感謝され、殺される運命を脱する。

その翌日、Babeに愛着を感じ始めていたHoggetの指導の下、初めて牧場で羊を駆りたて、牧羊豚として有能であることを認められる。Flyもこれを喜び、以後Babeに仕事を任せるようになる。この時からHoggetはBabeを牧羊犬コンテストに出場させようと密かに心に決めて訓練を始める。その後BabeはFlyの助言で食餌制限とトレーニングを行い、豚の特性である肥満を失っても牧羊の技術を磨く。

牧羊豚として生きる喜びを分ちあおうと羊のところに出かけたある朝、羊殺し犬二頭がHoggetの羊を傷つけているのを見つけ、怒りを感じて犬の一頭に噛みついて傷を負わせ退散させる。が、傷ついたMaは死に、その死を悲しんで傍にいたBabeがMa殺しの疑いをかけられる。HoggetはBabeを納屋に連れて行き銃殺しようと銃口を向ける。その時妻から羊殺し犬の情報を得たHoggetは事態を了解し銃を納める。その間Flyは事実を羊から聞き出すために主義に反して羊に丁重に尋ね、情報を得て安心する。

この後Hogget夫妻はBabeを全面的に信頼してFlyと同じ扱いをして家の中に入れるようになる。

Hoggetは牧羊犬コンテストの大会に出場を申し込み、Babeへの厳しい訓練を続ける。スピードでは犬に劣るBabeに勝つチャンスを与えたい一心からFlyは羊に丁重に頼んで羊仲間の合い言葉を聞き出す。Babeはその合い言葉を覚え

て大会に向かう。Hoggetと牧羊犬コンテストに臨んだBabeは犬ではないことで問題になるが、結局は出場を許される。合い言葉のおかげですぐに羊達の関心をひくことができたBabeはここでも丁重に羊にコースを説明して課題を伝え了解を得る。課題を了解した羊達は指示通りに行動し、BabeとHoggetは満点を獲得して優勝する。興奮した観衆の前でHoggetとBabeは並んで立ち、HoggetはBabeの頭を掻いてやりながら牧羊犬に言うように「よし」と誉めてやる。

Babeは親兄弟から離され、他に豚のいない羊農場で孤独な存在であり、食用としていずれは殺されるべき運命にある。が、Babeは好感を抱いているHoggetが経営し、優しい心から養母になってくれたFlyのいる農場にいたいがために明確な意図、役に立つ存在になりたいという願望実現のために牧羊豚になる決意をもって、一般通念での豚理解を超えた生き方、即ち自発的に牧羊の技術を学び、食欲にうち克ち、脂肪を減らすべくトレーニングを行うという道を選ぶ。この選択は決意、意志に基いた能力向上の努力、自己開示への道である。この意志と、偶然生じた羊泥棒発見の事件での活躍が、殺されるべき運命からBabeを救い、新しい未来を拓く。また努力の過程には養母・指導者としてのFlyの助力、友人としてのMaの助言、農場主Hoggetの協力が訓練を通して与えられ、Babeは目的を達成し、有能な牧羊豚となる。

Babeの自己実現の過程は、しかしながら、もう一点新たな可能性をBabe自身と彼をとりまく状況にもたらしている。他者の人格を認める関係は他者を愛することであるという普遍的命題がそれである。この物語では孤独なBabeの「孤立性」、Fly、Ma、Hoggetという「忠告者」、羊泥棒・羊殺し犬に立ち向うという「勇敢」な行為という昔ばなしの手法に加えて「親切」という要素が当初から強調されている。第一にはHoggetのやさしさが孤独なBabeには初対面で抱きあげられた瞬間に察知されていること。第二にはFlyがやさしさからBabeを養子とすること。第三には足を痛めたMaをBabeが丁重に礼儀正しく遇していること。第四にはMaを通して知り合った羊達やコンテストで出会う羊達にBabeが丁重に接していること。第五にはBabeを気遣う思いからそれまで羊には命令しかしなかったFlyが羊に丁重に話しかけること。第六にはBabeを信頼したHogget夫妻が豚に対しては破格の扱いとして犬と同様に家に入れること。これらの「親切」が意味するところは他者に関心をもち、一個の存在として他者を認めているという行為である。しかしてHoggetはBabeの信頼と忠誠を得、Flyは母として誇るべき養子の成長を見、羊達から反感を抱かれなくなり、BabeはMaから有用な助言を得、またMaは親身な友人Babeを得、羊達は仕事やコンテストでBabeに協力し、FlyにBabeの生死を決定する重要な情報を与える。しかしながらこれらは単に社会儀礼として形骸化した親切の結果ではなく、またギブ・アンド・テイクの原則にのっとった報償として与えられたのでもない。親切な行為を為したものの心のあり方が、相手の存在を認めるという率直な視縁を注ぐものであったが故に相手の心に触れて自発的行為として生じたものである。親密さに程度の差はあれ、他者の人格を認める、他者を愛する生き方がその基本にある。Babeの自己実現の過程は、愛の関係が成立し、育

まれていく過程でもある。

Ⅲ

Dick King-Smith の二作に於る自己の可能性追求、自己実現のテーマは読者に希望と期待を抱かせる展開のうちに終始する。が二作を通じて、存在することは孤独であること、不条理な死を迎えるべき運命にあることが前提としてあり、死が生を規定していることが基調となっている。しかし当事者が可能性追求という目的に向かって生きる意味を創りあげていく時、可能体としての実存を獲得しうるという実存主義的生き方が呈されている。そして他者を人格と認める生き方には理解と愛の関係成立の可能性が開示することが示唆されている。将来という未来の時間を刻々実現していく子どもの読者に積極的生き方を呈する佳作として評価すべき作品である。

注

1) 原田清人・原晶、1971「児童文学概論」建帛社 p. 9
2) 同上、p. 20
3) 同上、p. 31
4) 同上、pp. 31f
5) リリアン・H・スミス　1964　石井桃子、瀬田良二、渡辺茂男訳　岩波書店、p. 15
6) 原田清人・原晶、1971「児童文学概論」建帛社
7) 吉田新一編　1987「ジャンル・テーマ別英米児童文学」中教出版　p. 252
8) *Daggie Dogfoot*, Puffin 1980
9) *The Sheep-Pig*, Puffin 1985
10) 鴨については *Daggie Dogfoot* p. 43, p. 49, p. 51, p. 52, pp. 68f　カワウソについては *Daggie Dogfoot* p. 77, p. 82　七面鳥については *The Sheep-Pig* p. 25　犬については *The Sheep-Pig* pp. 21f, pp. 50-52　羊については *The Sheep-Pig* p. 44
11) 「ジャンル・テーマ別英米児童文学」p. 253
12) *Daggie Dogfoot* p. 36, p. 105 に豚と人間は別の言語を用いるが故に互の言っていることが理解できないとある。*The Sheep-Pig* p. 58, p. 59 に人間は動物の言っていることが理解できず、またする必要も感じていないことに言及。
13) Daggie は *Daggie Dogfoot* に登場する子豚。Babe は *The Sheep-Pig* に登場する子豚。
14) 小澤俊夫、1990「昔ばなしとは何か」福武文庫 pp. 170-172
15) 同上　pp. 38f
16) 同上　pp. 134f, pp. 164-170
17) 同上　pp. 199f, pp. 209-211
18) 同上　pp. 196-198　pp. 208f